

テレビ会議システムを利用した日本語クラス —コミュニケーション・アクティビティの可能性—

大藤 美帆

<キーワード>

テレビ会議システム、双方向コミュニケーション、会話クラス、
チームティーチング、インターアクション

1. はじめに

新潟大学留学生センターでは、1999年度前期にテレビ会議システムを利用した日本語クラスを実施した。テレビ会議システムは、テレビカメラとモニター画面を使って、離れたところにいる相手と画像・音声を同時に共有するシステムである。テレビ会議システムにはさまざまな活用法があり、一般的には離れたところにいる相手に講義をしたり、情報交換をしたりといった目的で使用されている(注1)。新潟大学では、このテレビ会議システムを日本語クラスで用い、双方向コミュニケーションを目指すための一つのツールとして活用しようと考えた。本稿では、実際のクラス活動を紹介しながら、そこで観察できたことをもとに、テレビ会議システムを用いた日本語クラスがどのようなコミュニケーション・アクティビティの可能性をもっているのか考察していきたい。

2. 新潟大学におけるテレビ会議システムの使用状況

2.1 設置状況

新潟大学には旭町、五十嵐の二つのキャンパスがあり、それぞれにテレビ会議システムを設置している。この二つのキャンパス間は電話回線で結ばれており、どちらかのキャンパスから電話をかけることでテレビ会議システムの使用が可能になる(注2)。テレビ会議システムには、テレビカメラとモニター画面のほか、外部カメラ、書画カメラ、コンピュータ、ビデオなども接続することができ、それらの画像・音声の共有も可能である。画面をズームにしたり、小画面を出したり、音声を消音にしたりといった操作はリモコンを使って行い、同じリモコンで相手側の操作もできる。今回は基本的なテレビカメラとモニター画面のみ使用した。

2.2 日本語クラスの形態

1999年度前期に1コマ60分の1回完結型クラスを4回実施した。これは希望制の課外授業として実施し、学習者の日本語レベルは初級から上級までとさまざまであった(注3)。また、旭町、五十嵐の各キャンパスに教師を配置しチームティーチングの形態をとった。事前にそれぞれのクラスを担当する教師が集まり、学生全員が協力してタスクを遂行する

形態のクラス活動を考えた。

3. クラス活動実践記録

3. 1 クラス活動での工夫

テレビ会議システムを利用した日本語クラスを運営するにあたり、モニター画面の存在を最大限活用することを念頭においた。テレビ会議システムでは、回線をつないだ状態(以下ONと称す)にしたり、回線をつないだまま画像を静止画・音声を消音にした状態(以下OFFと称す)にすることがボタンひとつで簡単にできる。このことにより、ONの状態では、場所は離れているとはいえ、画像・音声を共有した一つのクラス、OFFの状態ではそれぞれの独立したクラスが成立する。そしてOFFの状態では従来のクラスと同様の活動でONへの準備が行われ、ONの状態ではOFFの状態で活動したことを画面の先の相手に向かって伝えるという状況ができあがる。テレビ会議システムは離れた場所にいながら画像・音声を共有することが最大のメリットであるが、あえてOFFにすることで、それぞれ独立したクラス活動を可能にした。また、そのことでクラス全体にメリハリをもたせた。

さらに、ONの状態で行うときは、できるだけ一つのクラスであるということが感じられるようなクラス活動を行った。例えば自己紹介をするとき、片方が終わってからもう片方に移るのではなく、旭町→五十嵐→旭町と画面を通じて交互にやりあうことで、場所は別とはいえ同じクラスを共有しているという一体感や親近感が生まれるよう工夫した。

3. 2 クラス活動例

では実際のクラス活動の例を挙げながら、そこで筆者が観察したことを述べていく。クラス活動の流れを簡単なフローチャートで示した。以下、図の楕円は回線をOFFにした独立したクラス活動、四角は回線をONにしたつながったクラス活動を示す。

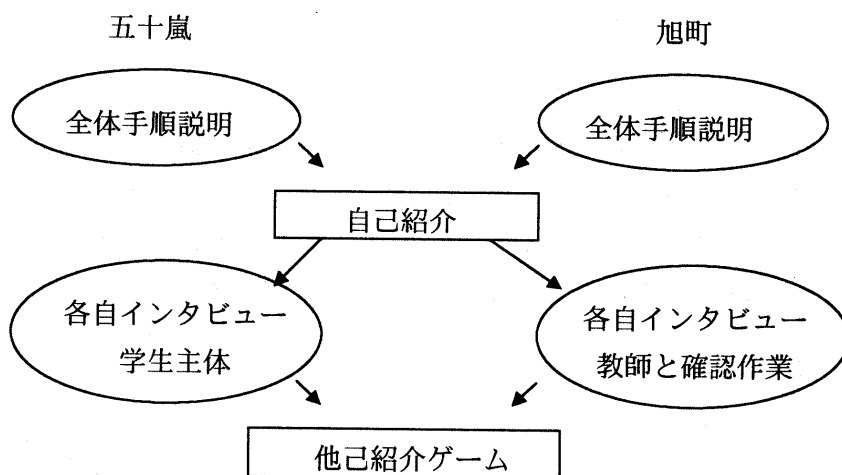
(1) 他己紹介

1999年5月25日

<旭 町>学生4名 日本語レベル：初級後半

<五十嵐>学生5名 日本語レベル：中級～上級

まず、同じクラス内で紹介する人を決める。OFFの状態でその人の専門、趣味、先週の日曜日に何をしたか、好きな食べ物についてインタビューする。そして最後のタスクでは、その人の名前をいわずにインタビュー内容を紹介する。相手側のクラスは、全員で相談しながら誰を紹介しているのかあてる。



[観察記録]

五十嵐キャンパスは中・上級の学生であったため、教師が細かい指示を出さずとも学生主体で各自インタビューを行い、質問があったら、教師にたずねるという形で進化した。一方旭町キャンパスは初級の学生であったため、最初に教師がモデル文を提示し、それを応用しながらインタビューを行った。他己紹介ゲームの段階では、五十嵐の学生が旭町の学生の日本語レベルを自然に考慮し、ゆっくり丁寧に相手の反応を確認しながら話すという行為が観察できた。

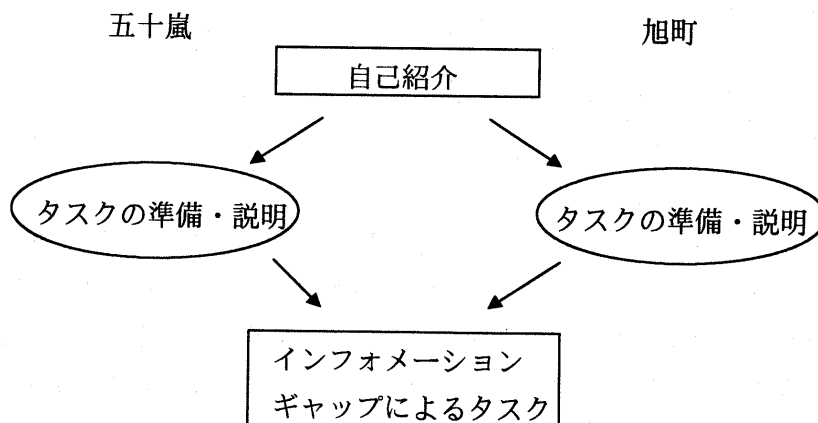
(2) 会話文ディクテーション

1999年6月8日

<旭 町>学生3名 日本語レベル：初級後半

<五十嵐>学生6名 日本語レベル：初級後半～中級

それぞれのクラスに未完成の会話文のワークシートを渡す。画面を通じてお互いに教えあい、ディクテーションをして会話文を完成させる。



〔観察記録〕

ディクテーションを行ったため、相手のいうことを正確に聞き取る必要があった。そのため、画面の先の相手に向かって「ゆっくりいってください」「初めからもう一度」などの聞き返しや自信のないところを確認する作業がひんばんに行われた。また、わからない単語を学習者同士が教えあったり、教師に聞いたりするといった行為がみられた。

(3) 2クラス間ジグソー

1999年6月22日

<旭 町>学生4名 日本語レベル：初級後半

<五十嵐>教師のみ

一つのセンテンスをいくつかに分けて、ひと区切りごと紙に書く。その際、センテンスごとに紙の色を変える。その紙をそれぞれのクラスにばらばらにわけ、画面を通じて読みあい正しいセンテンスに並べ替える。この回に限り、試みとして回線をずっとONにしたまま、旭町の教師主導でクラスを行った。

旭町の担当教師から手順説明



何色のカードがいいか聞く

単文完成のタスク



ディスコースを考える



会話風でやってみる

例：各自が次のような紙を持って読みあう

<旭 町>学生 A あの一 学生 B おとした 学生 C らしいんです 学生 D さいふを

<五十嵐>教師 E スーパーで 教師 F かいものして

〔観察記録〕

単純なジグソーではあるが、読みあいをするとき画面をまたいで、A→E→F→D→C→Bという順番で行った。AとEの間、FとDの間に画面が介在するため、何度読みあってもしつこいという感じはしなかった。学習者が納得のいくまで繰り返し読みあい、お互いに教えあうことで、教師に頼らず自らセンテンスを組み立てることができた。離れた場所にいるということをほとんど意識せず、クラスとしても一体感が生まれた。

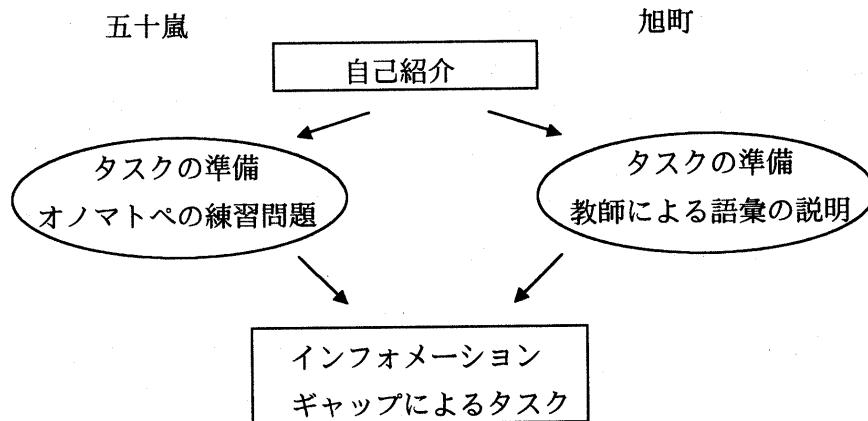
(4) 歌のディクテーション

1999年7月6日

<旭町>学生3名 日本語レベル：初級後半

<五十嵐>学生5名 日本語レベル：上級

歌の歌詞をいくつか区切り、それぞれのクラスにわける。画面を通じて読みあい、ディクテーションをする。その際、歌の歌詞であることはいわなかった。



【観察記録】

五十嵐キャンパスは上級の学生であり、語彙などを改めて説明する必要はなかった。そのため、OFFの状態では歌詞にでてきたオノマトペを応用した練習問題を行った。一方旭町キャンパスはOFFの状態では語彙の説明に十分時間をかけた。クラス活動(2)と同様ディクテーションを行ったため、お互いに画面を通して相手の発話を確認する作業が見られた。また、初級である旭町キャンパスの学生は、五十嵐の学生に「ゆっくりいってください」「もう一度いってください」と確実に聞き取れるまで何度も繰り返しを要求していた。五十嵐キャンパスもそれに応じ、ひとつひとつゆっくり丁寧に話をしていた。

4. コミュニケーション・アクティビティの可能性

これまで述べてきた活動例に考察を加え、テレビ会議システムを用いた日本語クラスがどのようなコミュニケーション・アクティビティの可能性をもっているか、その具体的項目をあげていきたい。

(1) 自然なインフォメーションギャップをうむこと

テレビ会議システムを用いた日本語クラスでは、それぞれのクラスは実際離れた場所に存在しているため、本当に相手の持つ情報が見えない。このことは、真の意味でのインフォメーションギャップを生じさせ、タスクの現実味を高める。通常のクラスでもインフォメーションギャップを用いた活動はよく行われるが、この場合相手はすぐ近くにおいて、相手の持っている情報も手の届くところにある。そのため、相手の情報を見ないように自分

の情報を見せないようにするにはどうしても多少の不自然さを伴う。しかし、本当に相手の情報が見えないということは、従来のクラスにあった多少の不自然さの解消につながり、クラス活動をより自然なコミュニケーション空間に近づけることができる。さらに、タスクのモチベーションを高めることにもなる。

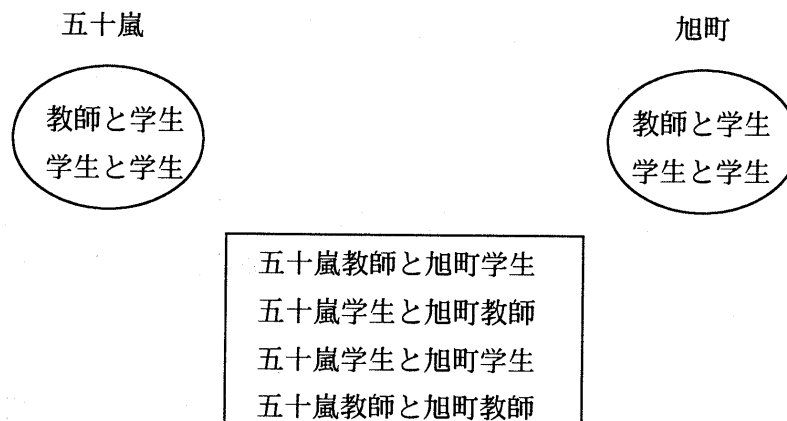
(2) ゆっくり丁寧なコミュニケーションプロセスが見られること

相手の持っている情報が見えないため、なんとかして相手の持つ情報を獲得しようとする意識が強まる。そのため、何度も聞き返したり、相手の発話を反芻したりといったことが自然になされる。また、画面が介在することで、聞き返しが不自然でなく、ごく自然のこことして行われる。さらに、クラス活動(1)と(4)では、2クラス間で学習者の日本語レベルが異なっていたため、日本語レベルが上の五十嵐の学生は相手の状況を確認しながらゆっくり丁寧に話すということが観察できた。

(1) (2) をまとめると、テレビ会議システムを利用することで自然なインフォメーションギャップが生じた結果、タスクのモチベーションが高まり、このことが丁寧なコミュニケーションプロセスを要求したと考えられる。

(3) 他方向インターアクションをうむこと

ON、OFF を使い分けることで、クラス活動に独立したクラスとつながったクラスという二つの局面が見られることは前述の通りである。一連のクラス活動でありながら、二つの局面が存在するという事は、下の図のような多方向のインターアクションを生じさせる。



このように、OFF の状態での教師と学生、学生と学生の従来のインターアクションに加え、ON の状態にしたとき、二つのキャンパス間で4通りのインターアクションがおこるということはテレビ会議システムを利用したクラスの大きな特徴といえる。

(4) レベルが異なってもクラスが成立すること

クラス活動(1)と(4)では学習者の日本語レベルが異なっていた。しかし観察記録で述べたように、OFFの状態ではそれぞれのレベルにあわせたクラス活動が十分可能である。また、このレベル差は、中上級の学習者には相手を考慮してゆっくり丁寧な発話をするということに結びつき、初級の学習者には自然な聞き返しに結びつく。

一見マイナス要因とも見える画面の介在、レベル差などが、かえってクラス活動でのコミュニケーションの現実味を高め、より自然なコミュニケーションを生むことになる。ここにテレビ会議システムを利用した日本語クラスの大きな可能性があると考えられる。

5. 今後のクラス活動にむけて

最後にテレビ会議システムの現状での問題点をあげながら、今後のクラス活動に向けての課題を提示する。

(1) 技術的課題

- ①カメラが動く角度が限られているため、人数が多すぎると画面にうまくうつらない。一方向の講義形態ならともかく、今回のようなタスク遂行型のクラス活動を行う場合、あまり大人数のクラスには適さない。現状では各クラス5～6人が適当かと思われる。
- ②画像・音声が伝わるのに少し時間のずれがある。しかし、このずれをマイナスとは考えず、ずれがあるからこそゆっくり丁寧なコミュニケーションプロセスが不自然ではないとプラスにとらえている。

(2) クラス運営上の課題

- ①クラス活動の中でON、OFFを切り替えたり、小画面を出したり消したりすることを効率よく行うためには、何よりもまず、教師が機械の操作に慣れなければならない。
- ②双方の教師が事前に話し合い、綿密なタイムスケジュールをたてる必要がある。そのため、通常クラスの二倍の時間がかかることを覚悟して十分な準備を行い、教師同士が信頼感をもって臨まなければならない。
- ③今回はフィードバックを行わなかった。これに関しては今後の大きな課題と考えている。

筆者の観察記録をもとに四つのコミュニケーション・アクティビティの可能性を示してきたが、これらはテレビ会議システムを利用した日本語クラスのほんの一側面にすぎない。今後さらに工夫をこらしたクラス活動を行うことによって、テレビ会議システムを利用した日本語クラスをより多方向から研究していきたい。

本稿は1999年11月、大藤美帆、足立祐子、押谷祐子が「国際日本語教育・日本研究シンポジウム」（於 香港理工大学）で行った発表をもとに、大藤が責任を持って加筆・修正したものである。

注

- (注1) アメリカなどでは、広大な国土のなかで時間と距離を節約し効率を上げるという側面から、広くテレビ会議システムが普及している（松澤1998）。新潟大学では効率をあげるというよりはむしろ、クラス活動の一ツールという位置づけでこのシステムを用いた。
- (注2) 新潟大学ではISDN回線を用いたテレビ会議システムを導入しているが、ほかにもインターネット回線を用いるものなどさまざまな種類がある
- (注3) 旭町キャンパスの学生は、医学部・歯学部に所属する学生であり、日常の研究に日本語をあまり必要としないため、ほとんどの学生の日本語レベルは初級後半である。しかし実習等で日本人の患者と接する機会が多いことから、会話レベルでの日本語学習を強く希望している。

参考文献

松澤 佳郎 (1998) 「アメリカにおけるテレコンファレンスに関するレポート」

<http://www.kbs.keio.ac.jp/~matsuzawa/anaheimreport/anaheimreport.html>

加藤 直樹 (1998) 「テレビ会議システムを用いた遠隔授業の評価」『日本語教育情報学会教育情報研究』Vol.14 No. 2

This paper shows the possibility of communication activities in Nihongo class by using TV conference system. International students center of Niigata university held Nihongo class which consider this system as a communication tool. In this paper, I introduce actual record of class activities and propose 4 effective side of Nihongo class by using this system which based on my observation. These 4 effective side are the following.

Nihongo class by TV conference system is possible

1. To bring natural information gap.
2. To bring slow and polite communication process.
3. To bring various interaction.
4. To manage if each class level are difference.

In conclusion, Nihongo class by using TV conference system has the great possibility which raise communication reality in class regardless of existence of distance or level difference.